

東洋英和女学院

---

# 説 教 集

---

第 5 号



2022

## 表紙写真について — 東洋英和幼稚園ホール —

幼稚園の現園舎は一九六二年に建て替えられました。増改築された場所もありますが、表紙写真のホールは変わらぬ姿です。

幼稚園のホールは、礼拝をするためだけの場所ではありません。当時の長野彌院長が張ってくださった桜木の床の上、子どもたちは心と体を動かしてリズム活動をし、積み木や組み木の構成遊び、ままごとなどをして日々遊んでいます。いつも遊んでいる場所で賛美と祈りのひと時を持つ時、子どもの普段の生活の中に神様がいらっしやることを強く感じます。

このホールで、入園式から始まり、アドヴェント礼拝、卒業式、学期の節目の礼拝やさまざまな行事、また保護者会や同窓会が持たれています。

東洋英和幼稚園の子どもたちが大好きな空間です。

東洋英和女学院

---

説 教 集

---

第 5 号

2022

# 目次

巻頭言

副院長  
学院宗教学部長（六本木校地）

高橋 貞一郎…………… 4

イエス様の言葉に従う大切さと、その恵み

副院長  
学院宗教学部長（六本木校地）

高橋 貞一郎…………… 6

飼い主のいない羊に対して

学院宗教学部長（横浜校地）

伊勢田 奈緒…………… 10

ろうそくの灯

大学人間科学部人間科学科教授

小坂 和子…………… 14

伝えようとする想い

中高部聖書科教諭

上野 峻一…………… 18

「種を蒔く人」のたとえ

中高部数学科教諭

中村俊哉……………22

神さまが共にいてくださること

小学部 長

吉田太郎……………26

旅の荷物を持たなくても

小学部 教諭

風間春乃……………30

一緒に嬉しい

東洋英和幼稚園 長

堤 加壽美……………34

「ほら、みて」

東洋英和幼稚園保育主任

渡 辺 みな子……………36

平和をつくる人

大学付属かえで幼稚園教諭

片岡朝子……………38

神さまに愛されイエスさまに支えられて、愛し合う

大学付属かえで幼稚園長

大瀧知子……………42

## 巻頭言

### 「第三の出逢い」

副 院 長

学院宗教部長（六本木校地）

高 橋 貞 二 郎

あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。

伝道の書 一二章一節（口語訳）

先日、元院長でいらした石井次郎先生の書かれたものに触れる機会がありました。そこにキリスト教学校における「第三の出逢い」が記されていました。短く紹介すると、次のような内容です。

第一世紀、ローマにクインティリアヌスという学者がいました。彼は学校を「出逢いの場」と考えました。クインティリアヌスは、当時の貴族たちが、子どもの教育を家庭教師の手に委ねる慣行に反対します。そして、子どもは学校へ通わすのが良いとします。なぜなら子どもは学校で「よい教師」に「出逢い」、また「生涯の友」に「出

逢う」からです。そこで彼は、通学を勧めました。

ところで、石井先生によるとキリスト教学校では、もう一つの「出逢い」が期待できるというのです。「第三の出逢い」です。それは「聖書」との出逢いであり、「創造主」との出逢いです。キリスト教学校では、冒頭で紹介した聖句に基づき、人々が「若い日に、自分の造り主を覚える」ことを教育の中核と考えるからです。

私は石井先生のおっしゃる通りだと思います。東洋英和女学院には、クインティリアヌスが言うように「よい教師」「生涯の友」との出逢いもあるでしょう。しかし、それだけではありません。キリスト教学校であるこの学院では、「聖書」「創造主」との出逢いがあります。私たちを限りない愛で愛され大切にしてください。「創造主」と、その愛を伝える「聖書」との出逢いは、今は勿論のこと、これから先いつでも、どこでも、どのような状況になっても私たちを励まし、時に慰め、生きる力を与えることでしょう。

礼拝は、まさに「第三の出逢い」の場です。この説教集には、幼稚園から大学の礼拝で読まれた聖書のみことばと、語られた説教が掲載されています。この説教集を通して「第三の出逢い」をさらに大切にしてもらえればと願っています。

（書名の「伝道の書」は、新共同訳聖書では「コヘレトの言葉」とされています）

# イエス様の言葉に従う大切さと、その恵み

副 院 長

学院宗教部長（六本木校地）

高 橋 貞 二 郎

ルカによる福音書 五章一―一節

イエスがゲネサレト湖畔に立つておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。イエスは、二そうの舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。そこでイエスは、そのうちの二そうであるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われた。シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えた。そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。そこで、もう二そうの舟にいる仲間と合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたか

らである。シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

今日はイエス様の言葉に従う大切さと、その恵みについてお話したいと思います。

私の上の娘が大学生だった頃のことです。ある日、娘が私に「油そば」って知ってる」と尋ねてきました。

皆さんは、油そばを食べたことがあるかもしれません、その時まで私はまだ「油そば」なるものを食べた経験がありませんでした。ですから正直に「油そば、知らない。それ何」と逆に尋ねました。

すると娘は「油そばはね、スープのないラーメンなんだよ」と答えます。「スープのないラーメンだって。そんなの美味しいのかなあ」と思わず言ってしまった。

私ができるように言うのには、理由がありました。私は、しばらくの間、北海道の札幌に住んでいました。

札幌のラーメンは、スープが重要なのです。スープが美味しければ店の評判も上がるし、スープが振るわないと評判も悪くなる。ですから、どの店もスープには時間をかけて工夫をしていました。

そんな美味しいスープがたっぷりどんぶりの中に入っていて、そこに麺が入っている。これが私の知っているラーメンでした。それなのに、そのスープがないなんて。私は先入観にとらわれて、そんなものが美味しいはずがないと思いました。

ですが、娘は「すごく美味しいんだよ。油そばのお店を見かけたら食べに行ったらいいよ」と勧めてくれました。「スープのないラーメンが美味しいなんて」。私は半信半疑でした。

それから暫くして、用事の帰り道を歩いていると、赤い字で「油そば」と書かれた看板を見つけました。

私は油そばを語る娘の嬉しそうな表情を思い出し、あの時の言葉に従って店に入ることにしました。中を覗いてみると、結構混んでいます。

私の順番になって席に着き、私は食券を出しました。そして、いよいよ目の前に「油そば」なるものが出てきました。

確かにスープはありません。カウンターには「おいしい食べ方」という説明文があり、熱いうちにお酢とラー油をどんぶりに入れてよく混ぜて食べるようにと書かれていました。益々「大丈夫かなあ」と思いましたが、指示通りにして食べてみました。

結論から言います。とても美味しかったです。

私は最初、油そばを勧められた時、自分のラーメンに対する先入観もあって半信半疑でした。ですが娘の言葉に従って、店に入り、実際に食べてみて本当に良かったとしみじみ思いました。

ところで、今日の聖書にも、「油そば」ではありませんが、先入観にとらわれて半信半疑だったけれども、イエス様の言葉に従って実際に行動し、豊かな恵みを受けた弟子たちの話が出てきました。

ある日、イエス様は湖のほとりで、集まってきた人々にお話をされてきました。ところが、多くの人が集まって来たので、そこにいた漁師シモン・ペトロに頼んで舟に乗り、岸から少し離れた所からお話しにられました。

お話が終わると、舟に乗っていたペトロに意外なことを言われます。なんと「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」というのです。

ペトロは驚きました。この湖で漁をするのには良い時間というのがあって、それは夜だとされてきました。漁師である彼は経験上そのことをよく知っていたと思います。

ペトロは、昨夜、夜通し漁をしましたが、魚は全然とれませんでした。もう、とつくに夜は明けて、日が高く昇っています。今までの経験からすれば、その時間に漁をするのは無駄なことでした。ペトロの「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」という言葉には、「半信半疑だけど、そこまで言うなら従ってやってみようか」という彼の気持ちが表示されています。ところがイエス様の言葉に従って漁をした結果、どうでしょう。彼とその仲間、網が破れそうになるほどの魚をとることができます。彼らは、イエス様の言葉に従い、そのような大きな恵みを体験したのです。その後、彼らはイエス様に従い、さらに豊かな人生を送っていきます。

さて、私たちのことを考えてみたいと思います。イエス様は、弟子たちに「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われたように、東洋英和で学ぶ一人ひとりに、他の聖書の個所を通して「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」、「隣人を自分のように愛しなさい」と言っておられます。すなわち敬神奉仕を実践してごらんくださいと言っておられます。

この生き方に半信半疑の人もいるかもしれませんが。しかし、イエス様の言葉に従って歩んだ時に、弟子たちが網を降ろして大漁を目の当たりにしたように、皆さんも大きな恵みを受けることを今日の聖書は伝えていきます。

これから後、私たちもイエス様の言葉に従い、敬神奉仕を実践しつつ、恵み豊かな日々を過ごしたいと思えます。

# 飼い主のいない羊に対して

学院宗教部長（横浜校地）

伊勢田 奈 緒

マルコによる福音書 六章三四～四四節

イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。そのうち、時もだいふたつだったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、時間もだいふたちました。人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買に行くでしょう。」これに対してイエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。弟子たちは、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。イエスは言われた。「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」弟子たちは確かめてきて、言った。「五つあります。それに魚が二匹です。」そこで、イエスは弟子たちに、皆を組に分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった。人々は、百人、五十人ずつまとまって腰を下ろした。イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。すべての人が食べて満腹した。そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。パンを食べた人は男が五千人であった。

目で見て、あるいは耳で聞いても不思議なこと―それが良いことであれ、悪いことであれ―、「そんなこと、信じられない」ということが起こります。しかし、考えてみれば私たちは「信じられない」と思う事柄にいつも直面しているのかもしれない。

本日のこのイエスのなさった出来事は四つの福音書が揃って記しています。それは福音記者であるマタイ、ルカ、ヨハネ、マルコの全員がこの不思議な出来事に、驚き、そして心から感動し、だから各々が忘れられないこの出来事を書いたのでしょう。それが五つのパンと二匹の魚で五千人のお腹を満たしたという奇跡物語です。

この物語でパンや魚の大きさを考えるのは聖書の読み方ではありません。私たちは心が満たされるという経験をすることがあると思います。食べるのを忘れるぐらい、心から満足したということがあると思います。

さてイエスの福音宣教の旅は本当に忙しかったことと思います。そして、「忙しい」ということはそれ程、当時の人々が心身共に弱っていて、救いを求めていたということでしょう。イエスは故郷の付近の村を巡り歩いたあと、弟子たちを呼び寄せ、二人ずつ組にして宣教に遣わされました。実はイエスは弟子たちをすぐには宣教に送り出さず、派遣の前にイエスは弟子たちに、ご自分の業を見せ、御言葉を聞かせ、さらに神の国の秘密も打ち明けられました。その後、杖一本のほか何も持たない姿で弟子たちはこれまでイエスから見て、聞いて、教えていただいたことを心にたっぷりと詰め込んで、イエスのご命令の下、福音宣教に出かけていったのです。そして、五千人の給食と呼ばれるこの出来事が起こったその日、弟子たちは宣教の旅から帰ってきて、イエスにそれぞれの宣教の報告をしたのです。その後、イエスは疲れた弟子たちを気遣って、人里離れた所で休むように指示されました。しかし現実には休むどころか、群衆は一行に気づき、追いかけて、先回りして彼らを待ち受けていたのです。イエスは飼い主

のいない羊のような有様をご覧になって深く憐れみ、人々に再び教え始められます。イエスはこの時、何よりも、まず、人々の心の渴きを感じておられたのでしよう。やがて日が暮れて夕食時となり、弟子たちはイエスに、人々が自分たちで近くの里や村へ行き食料を調達させることを提案しました。ところがイエスは「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と言われたのです。この時、弟子たちはイエスのように集まった人々のことを迷子のような生きる本当の意味や目的を失っている「飼い主のいない羊」のようだとはいなかつたのです。彼らは現実には人々のお腹を満たすことしか考えられず、全員に食べさせるのは不可能だと思つたのです。彼らは「いくらお金があつても、そんなことは無理です」と言い返します。先ほどまで、杖一本でイエスに命じられ宣教活動をし、その貴重な経験を報告したばかりの弟子たちだつたのですが。

イエスはパンが幾つあるのか、見てくるように命じます。弟子たちは言われたとおり、人々が持つているパンの数を調べ「五つあります。それに魚が二匹です」と報告します。イエスは私たちの手にあるものから奇跡の業を起こされる方であることを思います。私たちは絶対無理、できるわけないと思うことがあります。しかし、現実には昨日できなかったことが今日できることがあります。一年前に無理だと思つていたことが、今はそうではなくなつていることがあります。

イエスは弟子たちに、皆を組に分けて青草の上に座らせるように命じられます。「五千人の給食」と呼ばれるこの奇跡は、詩編二三編「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩ひの水のほとりに伴ひ、魂を生き返らせてくださる」の言葉を思い起こさせられます。まさにイエスは私たち一人ひとりをお休ませ、私たちの心も体も生きる命を満たすため、養ひ育てる羊飼ひであることを思います。

イエスは天を仰ぎ、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせました。弟子たちはそれを座っている人たちに直接、渡しつつ、その一人ひとりの目を見、そして、たとえば「どうぞ」とか、「お身体はいかがですか」とか、なにか声をかけながら接したことでしよう。そうする時、そこにいた心身共に飢え渴いた一人ひとりにはパンと魚の残りを集めると一二のかごにいっぱいになるほど、皆が心も体も満たされたということでしょう。福音書記者であるマルコは、単にパンや魚が増えたことを強調したのではなく、イエスは人々の心も体も養つてくださる神の子であること、そして飼う者のない羊のような人々の飼い主であることを証あかししたのではないのでしょうか。「奇跡」は、わたしたちも起こせるのかもしれませんが、苦しんでいる人、病氣の人、困っている人のことを自分のことのように祈り、互いに大切に思い、支えあつて、生きる時、心が満たされるほどの奇跡は起こるのではないかと思います。

# ろうそくの灯

大学人間科学部人間科学科教授

小坂和子

ルカによる福音書 二章一四節

「いと高きところには栄光、神にあれ、  
地には平和、御心に適う人にあれ。」

アドベントがやってきました。チャペル前にはイルミネーションがとまりました。新型コロナウイルス感染予防のため、みなさんは、授業が終わればあわただしく大学を後にしなくてはなりません。一年生の皆さんは、五号館の検温ブースにたちよる際に、ツリーが目に入ったことと思います。本来ならば五号館のエリアは、サークル活動や待ち合わせでいつも学生が行き交う場所ですが、ひっそりとしています。ツリーもこんな静かなアドベントなんて、と驚いていることでしょう。

同窓生の手によるリースも、いつもと同じように飾られています。そして、礼拝配信で、アドベント・克蘭ツに毎週一本ずつろうそくが灯っていくのを一緒に見守りましょう。ミッションスクールならではの、キャンパス

全体でクリスマスを待つ雰囲気、ゆっくり味わっていたきたいと思います。

チューリヒに留学していたころのことです。一二月初旬の昼下がりに、チューリヒ大学の近くの路地で、麻袋を引きずるおじさんを見かけました。茶色っぽいガウン、というよりはかなりくたびれた毛布のような上着を、頭からすっぽりと覆っていて、最初はつきりホームレスなんだと思いました。よく見ると、手元のメモを見ながら、家を探しながら、雪の積もった街を歩いているようなのでピンとききました。

スイスではサンタクロースのことを *Sanichlaus* (サミクラウス) と呼び、毎年一二月六日に子どもたちのもとにやってきます。彼は茶色っぽいガウンを着た従者 *Schmutzli* (シユムツリ) を引き連れて、雪の積もった森からロバに乗ってやってくるのです。私たちの知っているサンタさんとはずいぶん違いますよね。きっとその関係の人に違いないと私は確信しました。

子どもたちのいる家では、役所に届けると、*Sanichlaus* と *Schmutzli* が自宅を訪ねてくれるサービスがあると聞きました。子どもたちは詩を朗読し、その一年頑張ったことをほめられ(詳細なレポートが事前に提出されています)、その後で、袋からプレゼント(ナッツやクッキー、そしてみかん)をもらうのです。

私は大急ぎでその人に近づき、つたないドイツ語で、「あなたがサンタさんですね(“*Schmutzli*”は発音が難しい)。私は日本から来ました。本当にあなたがいるなんて、お会いできて光栄です」と話しかけてみました。彼は一瞬驚いた様子で立ちどまってくれました。でも、ちがう、ちがうというように首を横に振りながら、そして猛然と早口で話し始めました。わかりません。スイスドイツ語はとても聞き取りにくいのです。何か教えてくださいな

ているようにも、何か提案してくださっているようでもあります。やがて通じないのであきらめたご様子で、私にチョコレートとみかんを手渡し、ハグすると、にっこり笑って去っていきました。……何をおっしゃりたかったのでしょうか。

スイスのチョコレートは極上なので、すぐいただきました。でも、手のひらに残った小さなみかんは食べるのがもったいなくて、しばらくテーブルに飾っておきました。「ろうそく」ならぬ「小さなみかん」の灯ですね。議論の得意な欧米の人々とのディスカッションに入れず落ち込んだ夜、英文レポートに苦勞した時、折々に「小さなみかん」を眺め、あの日の場面を思い出すと、ほのぼのとした気持ちになりました。

その昔、まだ電気が行き渡っていないころをご想像ください。街灯は十分ではなく、夜の闇はほんとうに深く、星と月の光しかありませんでした。ドイツ文化圏には、一六世紀に、マルティン・ルターが生い茂る木々からこぼれる星空の美しさに心を打たれ、枝にろうそくを飾ったツリーを置いたという言い伝えがあります。木が燃えないように、枝の先端に小さなろうそくを飾ったものだったそうです。つまり、夜になってあたりが暗くなるに従い、まっくらな場所にぼんやりと、そして静かに、一本の木がその姿を現すことになりました。イエス・キリストが、闇の中に小さな存在として誕生した、かの日のできごとの再現と言えるかもしれません。

ふと、まっくらな森の小道を一人で歩くルターを想像しました。こぼれる星の光を仰いだとき、重圧を一身に背負うルターの脳裏には、まだ見ぬ厩のイエスをめざし、星の光に導かれて歩みを進める、東方の博士たちがあったことでしょう。

現代社会では、夜であっても、人工の光にあふれています。ほんものの光を感じるには、ビルの照明を消し、電灯を消し、車の走行を禁止し、家々やマンションの窓にカーテンをおろさなくてはなりません。言いかえれば、偽りの灯を消し、本来ある暗闇に対峙した時こそ、私たちは、何がほんとうの光であり、何が真の平和なのかをしっかりと気づくことができるように思われます。

三保の森の星空は、今夜も、小さな動物たちと草花の眠りを守っています。真夜中に、誰もいない真つ暗な五号館にひっそりとたたずむクリスマスツリーと星のオーナメントは、かつてルカがこころに思い起こし、ことばを選んで記した、クリスマスの起源に最も近い存在となっているかもしれません。

(本稿は二〇二二年一二月の週報短文をもとに起草したものです)

# 伝えようとする想い

中高部聖書科教諭  
上野 峻 一

マルコによる福音書 四章一〇～一二節

イエスがひとりになられたとき、十二人と、イエスの周りにいた人たちが、たとえについて尋ねた。そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される。それは、

『彼らが見るには見るが、認めず、

聞くには聞くが、理解できず、

こうして、立ち帰って赦されることがない』

ようになるためである。」

世田谷の教会で伝道師をしていた時です。教会員の方から、こんなことを言われました。「先生は、いつも礼拝で、ご自分の経験からお話しされますね。ただ説教を聞き終わると、たとえ話しか残らないことがあります」。

ものすごくショックでした。聖書の御言葉が残っていないのだと、御言葉を語る者として深く反省しました。だからでしょうか。牧師によつては一切、経験談やたとえ話を使わずに聖書の解説だけを語ることがあります。確かに、それが最も確実な方法だと思えます。

聖書の授業でも時々、たとえ話を使って説明します。それによつて、よくわかったと言つてくれる人もいます。けれども、たとえ話というものには限界があります。

中二のあるクラスでした。私が「自分は牧師なので、神様から英和生という可愛い羊を預かっています」と言いました。すると、ある生徒が、こう言いました。「私たちが羊なら、本物の羊は何になるのですか」。率直な質問でした。一瞬、「えっ」と戸惑つてしまいました。そこまでは、まったく考えていなかったからです。

これが、たとえ話の限界です。何かをわかりやすく伝えようとして、たとえを用います。しかし、そのたとえ話の中では説明できないものがあります。つまり、伝えたいことに完全にピッタリ合う、たとえ話をすることができないのです。完璧に整合性が取れないのが、たとえ話というものです。

だから、イエス様の弟子たちや一緒にいた人たちは、「もつとストリートに語ってください」と言いたかったのかもしれない。「たとえ話ではわからない」と言いたかったのかもしれない。

ところが、聖書を読んでも、イエス様が弟子たちに、はっきりと伝えていることがあります。その一つがイエス様の十字架と復活の出来事です。しかし、いつも一緒にいた弟子でさえ、このことは、まったく理解できませんでした。

皆さんはどうでしょうか。ハッキリ言つてほしい派ですか、それとも遠回しに伝えてほしい派でしょうか。もし

かしたら、これはタイプが分かれるのかもしれませんが。私の場合はハッキリ言ってほしい派です。変化球よりも、ストレートで勝負してほしいのです。それに対して、私の四歳になった娘は遠回しにたとえて伝えてほしい派です。ストレートに伝えてダメです。だから家では、いつも変化球で勝負しています。

ある時、家に帰るとリビングがぐちゃぐちゃ、文字通り「カオス」でした。私は秩序を重んじる片付け星人です。だから、リビングのカオスに耐えられません。そのため、娘にすぐに片付けるように言いました。ところが、彼女はテレビを見ながら「嫌だ。まだ遊んでいる」の一点張り。このままストレートに勝負しても、最後には彼女が暴動を起します。そこで、いつもように変化球を投げました。

「た、大変だ。このままだと、オモチャたちが、迷子になっちゃう。迷子になったら、きっと皆、寂しくて、泣いちゃう。どうしよう。どうしよう。これは、集団オモチャ迷子事件だーっ」と。

よくわからないけどリアルに騒ぎました。すると、オモチャの一大事を察して「私が、お家に連れて行く」と慌てて、皆をお家に送ってあげました。めでたし、めでたし。

イエス様が宣教をされた時も、ストレート型と変化球型の人がいちやうです。イエス様は、それを一二弟子や周りにいる人たちと外の人たちとを区別していました。この外の人には、すべてが「たとえ」で示されると言います。彼らにストレートには語りません。正確にはストレートに語る事ができないのです。なぜなら、彼らが外の人であるからです。彼らは、まだ内側には入って来ない人々です。もう一步踏み込んで、内側に入って来なければ伝わらない、伝えられないことがあります。たとえを用いて語るしかなかったのです。それが、預言の成就となります。

イエス様は、外の人々にストレートに伝えたらダメなことを知っていました。彼らにストレートに言ったら、暴

動を起こします。いや実際、やがて彼らは暴動を起こします。それが、主イエス・キリストのご受難、そして十字架です。

しかし聖書の出来事は、それでおしまいでなかったのです。外の人へのたとえ話が人々の心に残りました。それは、いつの日か、外の人が内側に入った時に、その意味がわかるためです。

今はまだ「彼らは、見るには見るが、認めず、聞くには聞かぬが、理解できず、こうして立ち帰って赦されることがない」ままです。しかし、ずっと、そのままではいはずがありません。神様の願いは外の人ではなく、内側に、イエスの周りに近づいて来てほしいのです。より近い関係になれば、語り方はきつと変わるはずです。私たちだけでそうです。近づいて来る関係があるからこそ伝えられることがあります。

本当は、はつきり伝えたいことがあります。けれども、相手を想うがゆえに、はつきりと伝えられないこともあります。牧師が礼拝の説教で自分の経験から「たとえ」を語る時も、外の人々に少しでも内側に入ってきてほしいからです。もちろん、最初に話した教会の方は、もつとストレートに御言葉を聞きたかったのでしよう。ストレートか、変化球によるたとえ話か、いつだつて悩ましいところですよ。しかしメッセージを伝える、その目的だけはハッキリしています。何がどうであっても聖書の御言葉、主イエス・キリストご自身つまり、神の愛を伝えたいのです。主なる神様の想いが、ここにあります。私たちは相手のことを考えすぎて、かえって伝え方に悩む時があるかもしれません。けれども、もしそこに「愛」があるなら、その想いは必ず、いつか届きます。そのことを信じて今日も勇気を出し、そして愛をもって相手に伝える言葉を求めたいと思います。

# 「種を蒔く人」のたとえ

中高部数学科教諭

中村俊哉

マルコによる福音書 四章一〜九節

イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびただしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群衆は皆湖畔にいた。イエスはたとえでいろいろと教えられ、その中で次のように言われた。「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった。また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育つて実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。

私は東洋英和に来る前、一年間だけですが、田舎の学校で働いていました。この学校は人里離れた場所にあった

のでとても広く、敷地の中には二〇ヘクターを超える広大な森がありました。私はこの学校にいたとき、こっそりと畑を作っていました。野菜や花の種を蒔いて育てていたのです。このようなことを始めたきっかけの一つは暇潰しでした。この学校では土曜日に、授業がないにもかかわらず、先生たちが出勤しなくてはいけなかったのです。生徒があまりおらず、大した仕事もないのに夕方まで学校にいるのは退屈でした。そこで、私は何か生産的なことをして暇を潰そうと考えました。そのようなとき、卒業した生徒が残っていたと思われる植物の種を沢山見つけたので、畑を作ることにしたのです。毎週土曜日、私は森に入り、目立たず他の植物が生えていない場所を耕して種を蒔きました。そして肥料をやったり雑草を取ったりして汗を流しました。この学校は仕事が大変でストレスも多い職場でしたが、この週一回の畑仕事は気楽でリラックスできる楽しい時間でした。

私はこの経験から二つのことを学びました。一つ目は「植物の種は古くても普通に育つ」ということです。私が蒔いた種はほったらかしにされていた古いもので、有効期限を何年も過ぎたものもありました。中にはカビが付いたものもありました。そのような種が発芽するのか半信半疑だったのですが、捨てるのも勿体ないので蒔いてみると、大半が発芽して大きく育ちました。表面にカビが付いていたものも、中の大切な部分は皮にしっかり守られていたようです。古い種も芽が出ない訳ではない。このようなことは農業や園芸に詳しい人には常識なのかも知れませんが、当時の私には新鮮な驚きでした。ちなみに少し前のことですが、二千年前のナツメヤシの種が発芽して育つたというニュースが話題になりました。イスラエルのある研究機関が古代の遺跡や洞窟から見付かった種を蒔いてみたのだそうです。イエス様がまだ生きていた時代の種が現代に育つとは、植物の生命力には驚かされるばかりです。私がこの経験から学んだことの二つ目は「植物の生長を見ることには格別の喜びがある」ということです。畑

仕事は重労働である上、さまざまな困難を伴います。天候が不安定だったり、鳥やタヌキが畑にちよっかいを出したりすることもあります。あれこれ世話をしても、結局芽が出ない種もあります。しかし、それだからこそ種が芽吹き育つことには感動を覚えます。

さて、今日の聖書の箇所は「種を蒔く人」のたとえ」という有名なたとえ話です。これが意味する所は先ほど読んだ新約聖書六七ページの下半分に書かれています。種は神様のメッセージを伝える言葉、それを蒔く人はイエス様、時かかっている土地は人間の心です。神様はイエス様によって蒔かれた自分のメッセージが人々の心に根付き、それが豊かな実りをもたらしことを望んでいます。しかし、種は良い条件が整った土地に落ちなければ芽が出ないし、仮に芽が出ても大きく育ちません。同様に神様の言葉も、それを聞く者の心が整っていないければ根付かず、実りをもたらしません。このたとえ話はそのことを私たちに教えています。また、このたとえ話にはもう一つ見落としてはいけない点があります。それは道端、石だらけの土地、茨が生えている土地など、植物が育つにはおよそ適さない土地にも種が蒔かれたことです。この話を聞いた皆さんの中にも「そもそもなぜ荒れた土地にまで種を蒔くのだろう」と考えた人がきつといるでしょう。これはなぜでしょうか。私が以前聞いた話によると、当時のパレスチナの種蒔きは、まず地面に種をばら蒔き、後からその土地を整えるという順序で行なったのだそうです。従って、荒れた土地に種が落ちることは珍しくなかったのです。もちろんそれを蒔きっぱなしで放置すれば実りは得られません。しかし、良い実を結ぶことを信じて鋤を入れ、必要があれば石を拾ったり、茨を取り除いたりしたのです。このたとえ話の「種を蒔く人」すなわちイエス様もあらゆる人に対して平等に神様の言葉の種を蒔きました。そして、それらがいつかは人々の心に豊かな実りをもたらしことを信じたのです。

東洋英和では毎日礼拝が行われ、聖書の言葉すなわち神様の言葉の種が蒔かれ続けています。聖書に関心がある人の心にも、今の所は関心がない人の心にも同じように蒔かれています。多くの種はすぐには芽を出さなかったり、芽が出て根付かないまま枯れたりすることでしょう。しかし、幾つかの種は芽を出して根付くかもしれない。カビが生えるほど長い間ほったらかしにされても、遠い未来に芽吹くかもしれない。そのような種の生命力を信じ、希望を持って今日も明日も種は蒔かれ続けます。

# 神さまが共にいてくださること

小学部長 吉田 太郎

マタイによる福音書 二八章二〇節

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

教会の暦、カレンダーでは今週は受難節、パッションウィークと呼ばれるイエスさまの十字架の死と復活を覚える大切な一週間となります。Passionとは「激しい感情」「情熱」とか「苦痛」「キリストの十字架の苦難」を意味します。

一昨日の日曜日が「棕櫚の主日」、「パームサンデー」という、イエスさまが子ロバに乗ってエルサレムへ入城する日。そして明日はお弟子さんたちの足を洗う、「洗足の木曜日」といい、過越の食事をして、イスカリオテのユダに裏切られて、捕まる日です。そして、十字架にかけられて殺されてしまう金曜日を「受難日」「受苦日」。そして、イエスさまが復活される日曜日の「イースター」まで。結構、盛りだくさんの一週間。これを受難節、パッションウィークというのですが、今週がまさにそのパッションウィークにあたります。

さて、今月の聖句はマタイによる福音書二八章二〇節にある

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

という聖句ですね。皆さんのお教室にもこの聖句が貼ってありますね。これはマタイによる福音書の最後の一節、結びの言葉になります。

イエスさまが十字架にかけられたとき、多くの弟子たちは自分たちも逮捕され、処刑されてしまうかもしれない、という「恐れ」から、その場から逃げ出してしまいます。一番弟子であることを自認していたシモン・ペトロはゲッセマネの園で捕まって最高法院へ引き渡されていくイエスさまを心配して、後を追って行きました。しかし、やはり最後は「恐れ」から「そんな人は知らない」と、呪いの言葉さえ口にしながら、イエスさまの仲間であることを強く否定してしまいました。自分も捕まって、酷い目に遭ってしまうのではないか。それが怖くて、怖くて、ペトロさんは一番大事なイエスさまを見捨てて、逃げ出してしまったのです。イエスさまを裏切った翌朝、朝陽と共に鶏の鳴く声を聞いたペトロは外に出て激しく泣きました。大切な人を裏切ってしまった後悔と、自分は何て弱い人間なんだ、卑怯な人間なんだと、自分を責めるのでした。

イエスさまの十字架の死と復活を理解できないで、恐怖と絶望の中で扉を閉じていた弟子たちは、自分たちの故郷であるガリラヤへ戻って行きます。すべてを失ったとき、彼らが戻る場所は「故郷」「ホーム」だったのです。逃げようにも行く当てのない、彼等にはそれしか、選択肢がなかったのです。希望を失って、ガツカリして帰って行ったガリラヤで、弟子たちの前にイエスさまが現れます。普通に考えたら、「わあ、イエスさまだ」と大喜びしたっていいところですが、弟子たちの中には復活のイエスさまに出会っても、まだ疑う者もいた、と記されています。

す。目の前にイエスさまが現れてくださっているのに、まだ信じられない。共に歩んだお弟子さんでさえそうなのですから、私たち人間というものは弱い存在なのだと思わされます。そんな状況の中で復活されたイエスさまが弟子たちに語りかけた言葉、それが

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」  
というメッセージでした。

神さまが共にいてくださること。この喜びのメッセージを受け止めることができたとき、私たちはこの「恐れ」から解放され、新しく歩み出すことができます。

イエスさまのご復活を待ち望む、受難節の今日、あらためて、これから始まる新しい一年を、インマヌエル「神は我らと共に」という言葉を心に覚えて歩んでいきましょう。



# 旅の荷物を持たなくても

小学部教諭 風間春乃

ルカによる福音書 九章一節、六節

イエスは十二人を呼び集め、あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能をお授けになった。

十二人は出かけて行き、村から村へと巡り歩きながら、至るところで福音を告げ知らせ、病気をいやした。

みなさんは、イエスさまが数多くの奇跡を起こされたことを知っていらつしやると思います。水がぶどう酒に変わったり、目の見えない人が見えるようになったり、死んだ人が生き返ったり……。イエスさまは、まだまだ、たくさんこの世界でなさいました。目の前でそうしたことを見た人々は、とても驚きました。そして、このイエスさまの奇跡から「神さまにできないことはない」と、心から神さまのお力を信じたのです。それが人から人へ伝わり、イエスさまの行かれるところには、神さまのお話を聞きたい人々、病気を治してもらいたい人々がいっぱいも大勢集まってきました。

あるとき、イエスさまは、一二人のお弟子さんをご自分の代わりにいろいろな村へ行かせ、そこでイエスさまが

これまでになさっていたのと同じお仕事をさせようと考えられました。イエスさまは、一二人のお弟子さんを集めて二人ずつ組になって近くの村に行くようお命じになりました。そして、その場所で働くために、悪い霊に打ち勝ち病気を治す力とその力を使う資格をお弟子さんに与えられました。お弟子さんたちは、これまでイエスさまがなさる神さまの業を見てはいましたが、病気を治したことはありません。「神の国」について人々に教えたこともありません。皆、特別な力を持たないごく普通の人だったからです。しかし、イエスさまが神さまのお力をお弟子さんに与えてくださったので、一二人はイエスさまと同じように人々の病気を治し、神さまのことを教えられるようになったのです。

さて、一二人のお弟子さんは、イエスさまと離れて知らない村へ行き、何日間も慣れないお仕事をしなければなりません。お弟子さんたちは、きつと旅に持って行くものを頭に思い浮かべたと思うのです。みなさんがしばらく旅に出るとしたら、どんなものを持って行くでしょうか。洋服や下着、食べ物、水、お金……。大きな荷物ができてしまいそうですね。イエスさまは、お弟子さんたちに持ち物についてこう言われました。「旅には何も持って行くてはならない」。これから、旅立とうというのに、持ち物は無しと決められました。杖もパンを入れる袋もパンもお金も着替えもです。神さまからいただいた力で病気を治したり、悪い霊を追い出したりするので、お礼のお金も受け取つてはいけません。食べ物を買うお金、宿屋さんに払うお金、町にたどり着くまでに食べるパン、歩くときに使う杖、どれもみんな持って行きたいものです。イエスさまは、お弟子さんが不安にならないように、町に入ってからすることを教えられました。よい人がいてその家に泊めてもらえることになったら、その町での仕事が終わるまでずっとその家で寝ることも食べることもお世話になるように、と。こうして、お弟子さんはイエスさま

からお力をいただき、何も持たずに二人組で出かけて行つたのでした。六節をもう一度読んでみます。

十二人は出かけて行き、村から村へと巡り歩きながら、至るところで福音を告げ知らせ、病気をいやした。

神さまがお弟子さんに力を与えてくださり、神さまのご用をするのに必要な物を神さまが与え続けてくださったのです。ですから、どのお弟子さんも立派にお仕事をし、イエスさまのもとに無事戻ってこられました。

私たちは、毎週日曜日に教会で礼拝をします。今は、おうちからオンラインの礼拝に参加している方もいらっしゃるでしょう。私は、毎週礼拝の中で、神さまに安心をいただき、力をいただきます。今週も、礼拝のさいごに牧師先生がこのように祈って送り出してくださいました。

「平和のうちに世界へと出て行きなさい。勇気を持ちなさい。いつも善を行うよう努めなさい。悪を持って悪に報いてはなりません。気落ちしている者たちを励ましなさい。弱い者たちを支え、苦しんでいる者を助けなさい。すべての人を敬いなさい。主を愛し、主に仕え、聖霊の力によって喜びなさい」。

イエスさまがお弟子さんに力を与えられたように、私たちも日々神さまのお力をいただき、教会からそれぞれの場所に遣わされています。旅の荷物を何一つ持たないそのままの私でも、神さまが強めてくださり、神さまのご用をするために必要な勇氣や知恵を与えてくださっているのです。



## 一緒に嬉しい

東洋英和幼稚園長

堤

加壽美

フィリピの信徒への手紙 四章四節

主しゅにおいて常に喜よろこびなさい。重かさねて言いいます。喜よろこびなさい。

さっちゃんはお父さんと公園に行くのが大好きです。今日も公園で「よいいどん」と走ったり、サッカーをしたり、虫を見つけていました。

たくさん遊んで喉が渴いたので、大きな木の下にある椅子に座って水筒の水を飲みました。木陰で少し風が吹いてとてもいい気持ちです。風に揺れる葉っぱや、空の雲を眺めていました。その時、さっちゃんの座っている近くの草むらで何かが動きました。

「お父さん、何か動いた。何かいるのかな」

お父さんと少し草をかきわけてみると黒い小さなだんご虫がいました。捕まえようとしたら丸くなりました。そつと手の上に乗せてじつとしていると、黒くて丸くころころしているだんご虫が少しずつ動いて、小さい足がた

くさん出てきてさっちゃんの手の上を歩き始めました。くすぐったい感じです。

「私の幼稚園にもだんご虫がいるの。みみずもいるのよ」  
というとお父さんは、

「公園みたいだね。あとは何がいるの」

「かえるでしょ。ちょうちょうも飛んでいたのよ」

さっちゃんは幼稚園の庭を思い浮かべてみました。

「そうだね。このあいだ小さい種を植えたらひまわりが咲いたの」

黒いダンゴムシ、赤いみみず、青いちょうちょう、黄色いひまわり。足がたくさんあったり、羽がついていたり、おたまじゃくしからかえるになったり、種からひまわりが咲いたりと不思議なことがたくさんあります。

「それから幼稚園には先生とお友達もいっぱいいるの」

さっちゃんは、一人ではなく、神さまが創ってくださったたくさん仲間と一緒にいて嬉しいと思いました。

# 「ほら、みて」

東洋英和幼稚園保育主任

渡 辺 みな子

## 詩編 一三三編一節

見よ、兄弟が共に座っている。

なんとという恵み、なんとという喜び。

この聖書が書かれた頃、国と国が喧嘩をして、行きたくもないのに他の国に住まなくてはいけなくなることもありました。つらいことがたくさんあって、自分でがんばってどうにかしようとしてもできなくて、苦しんだり、悲しんだり、怒ったりしている人がたくさんいたそうです。

けれどもそんな中でも、今の聖書の言葉のように、仲間と一緒に座って礼拝をしていた人たちがいました。そして、このように集まって祈ることができるのは神さまからの恵み、つらい毎日の中でも神さまが喜びをあたえてくださると、喜んで作られたのがこの聖句です。

先生は毎日鳥居坂を上って幼稚園に来ています。ある日、いつものように幼稚園に向かって歩いてみると、前に

小学部の制服を着た一年生くらいの女の子が一人で歩いていました。

ランドセルを背負って、手提げかばんを持って、ゆっくりゆっくり、あつちを見たり、こつちを見たりしながら歩いています。すると、急にしやがみ込んでなにかを拾いました。その子の手のひらをのぞいてみると、赤い大きな椿の花が乗っていました。

その道には椿の木があるので、きつと木から落ちた赤い花を見つけたのでしようね。その子はとてもとても大切そうに手のひらの椿の花をそうと手提げかばんの中にししまいました。そして、まるで宝物が入っているかのようにして、今度は急ぎ足で歩き出しました。

きつと、学校についたら大好きな友達に「ほら見て。学校に来る途中で拾ったの。きれいでしよう」と見せてあげるのでしょうね。

私たちも、幼稚園で遊んでいると、「ほら。緑色の石があるよ」とか、「この石の下にコオロギがいるよ」とか、「ほらみて。こんなに早く走れるよ」とか、何かいいことがあると周りの友達や先生に教えてあげたくくなりますね。

もう一度、聖書を開いてみましょう。

聖句「見よ、兄弟が共に座っている。なんとという恵み、なんとという喜び。」

隣を見てみましょう。反対側の隣も、今度はぐるっと周りの友達を見ましょう。私たちには、きれいな椿の花を見つけたときに見せてあげたくなるような友達がたくさんいます。そのことを感謝して、今、悲しんでいる人、困っている人がいたら、その人たちも大好きな人たちと一緒にお祈りをして安心して過ごすことができますように、お祈りいたしましょう。

# 平和をつくる人

大学付属かえで幼稚園教諭

片岡朝子

マタイによる福音書 五章九節

「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。」

エフエソの信徒への手紙 二章一四節

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。」

この間、A男ちゃんが空き箱で作った物を友だちに向けて「バーンバーン」と言っていました。私が「それはなあに」と聞くと、A男ちゃんは「鉄砲」と答えました。私は「バーンって撃つ鉄砲は、人にけがをさせたり、人を死なせる怖いものだから……作らないでほしい」と言いました。A男ちゃんはじつくりと考えて、「じゃあ、こっち側にも棒をつけて翼にして飛行機にする」と言い、さっそくもう一本の棒を作り始めました。

公園では、戦いごっこを楽しんでいる子どももいます。お家にはおもちゃの鉄砲やおもちゃの剣があつて、

悪者をやつつける真似をしている子どももいると思います。でもずっと以前から、かえで幼稚園の先生たちは、空き箱や積み木や木工で戦いの道具を作ることや、戦いごっこをすることは、悲しいこと・怖いことと伝えてきました。(そして、もつとすてきなおもしろい遊びがあることに誘います) なぜ、そうするのでしょうか。

それは先生たちの心の中に、イエスさまから教えられた大切なことばがあるからです。「平和をつくる人は幸いです」というみ言葉です。平和というのは、人と人が大切に思い合うことです。私たちが安心して眠ったり、ご飯を食べたりできることです。私は、そんなさやかな暮らしを守りつくる人が、平和をつくる人だと思っています。人と人が大切に思い合うことが、平和です。

戦争というのは、国と国との争い、けんかです。今、大きな戦争が起きていることを、テレビで見て知っている人もいるかもしれません。

戦争の起きている国の人たちは、とても怖い苦しい思いをしています。その中には、安心して眠ることも、家族で一緒にご飯を食べることもできない子どもたちもいます。「戦争が終わってほしい」と私は毎日お祈りしています。でも戦争はなかなか終わりません。友だち同士のけんかだったら、いつもみんながしているように、それぞれの気持ちを持ちを言い合って、「ごめんね」と言って仲直りすることができます。仲直りをしたら、また一緒に遊ぶこともできます。しかし、国と国が戦争は、仲直りすることはとても難しいことなのだと言、さらに、思っています。たくさんの方が傷つき命をなくしていますが、それでも世界中でなかなか終わりません。本当に悲しいことです。

イエスさまは私たちに平和を大切にする人になってほしいと願っていらっしゃいます。だから私たちは、たとえ「ごっこ」であっても戦いの遊びを楽しむことは、幼稚園ではしないように思っています。自分の作った武器を

人に向けることはしないようにと思っています。

今わたしたちにできることのひとつは、命をくださった神さまを思い、その命を大切にして、みんなで平和を祈り続けることです。イエスさまが、私たちの祈りを聞いて神さまに届けてくださっています。

私は、いつかみんなが大きくなった時に、「戦争は、悲しくて怖い、してはならないこと」と言われたことが心に残っていて、イエスさまのお話と一緒に思い出せますようにと願っています。そして、ここにいる子どもたちが平和をつくる人になりますようにと祈っています。自分もそうなることができますように、と祈ります。

難しいことです。でも今も、そしてこれからもイエスさまがいつも一緒にいてくださり、平和を大切に作る気持ちを支えてくださいます。安心して大きくなっていきましょう。

参照 『カナダ婦人宣教師物語』（東洋英和女学院）



# 神さまに愛されイエスさまに支えられて、愛し合う

大学付属かえで幼稚園長

大 漣 知 子

## ヨハネの手紙一 四章一二節

愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。

## ローマの信徒への手紙 一二章一五節、一八節

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。

すべての人と平和に暮らしなさい。

ドイツとフランスの間にアルザスというところがあります。今日は今から一〇〇年以上前にそこで生まれた一人の男の人のお話をします。その人の名前はアルベルト・シュバイツァー。大きくなってから、大学の先生や教会の牧師先生や病気を治す先生になった方なので、私は「シュバイツァー先生」と呼びます。

シュバイツァー先生のお父さんは、教会の牧師先生でした。ブドウの畑の中にある教会には高い塔があり、塔の

上の方には鐘がついていました。礼拝の時やお祈りの時には、その鐘がディンドンディンドンと鳴り、村中に響きました。シュバイツァー先生は赤ちゃんの頃から日曜日には教会に行き、礼拝の中で神さま・イエスさまのお話を聞きました。お家では、お食事の前や寝る前にお父さんお母さんと一緒にお祈りをして大きくなりました。

シュバイツァー先生がここにいるみんなぐらいの時の礼拝の中で、アルザスから遠いアフリカのジャングルに行つてイエスさまのことを伝えたカザリ先生の話を書きました。その時シュバイツァー先生は、「アフリカのジャングルはどのようなところなんだろう」と思つたそうです。

それから何年か経ち、シュバイツァー先生が小学生のある日のことでした。お友達が何人か家の入口で呼びました。「ねえ、これから一緒に小鳥を撃ちに森に行こう」……シュバイツァー先生は「いいよ」と応え、木の枝にゴムを張つたゴム銃を持つて出かけました。へ実際に木の枝で作つたパチンコと石を子どもに見せる森の中に入ると、チュンチュンピッピッピッとたくさんの小鳥たちが鳴いていました。「いるいる、あそこにいるよ」と、シュバイツァー先生とお友達は、ゴムをピーンと張つて、木の枝の上にいる小鳥を狙つて石で撃とうとしました。その時です。教会の鐘がディンドンディンドンと鳴り出しました。シュバイツァー先生にはその音がまるで「神さまがくださったいのちを大切にしなさい」「殺してはなりません」と言つているように聞こえました。シュバイツァー先生は、「ぼく、やめる」と言つて、ゴム銃を地面に投げ捨てました。お友達は「どうしてなの」と驚きましたが、シュバイツァー先生は急いで小鳥たちのいる木の方に走つて行きました。そして小鳥たちに向かつて「ごめんね。さあ逃げて」と言いました。小鳥たちは、さーっと空に飛んでいきました。その日から、シュバイツァー先生は、けつして自分の楽しみのために虫や小鳥や動物を殺すことや、いたづらをすることはしませんでした。お

友達に誘われても「ぼくはしない。神さまのつくられたいのちを大事にしたい」と、言って断りました。

やがて、シュバイツァー先生は大人になりました。たくさん勉強をして大学の先生になりましたし、お父さんと同じように神さまの話をする牧師先生にもなりました。それから、教会でオルガンを弾くこともしました。たくさんのお仕事をしていたシュバイツァー先生でしたが、いつも子どものころに聞いたアフリカの話が心に残っていました。「アフリカのジャングルの奥には、病院の無い場所がある。お医者さんになって、その人たちの病気を治したい。その人たちにイエスさまのことを知らせたい」……先生は、三〇歳の時にお医者さんになる勉強を始めました。勉強は何年もかかり大変でしたが、神さまからいただいた「困っているや苦しんでいる人のために生きなさい」という思いがあったので、勉強は楽しかったそうです。三七歳の時に、とうとうお医者さんになり、アフリカへと出発しました。そして長い長い旅をしてジャングルに着きました。

ジャングルの中に病院ができたことを知って、あつちからもこつちからもたくさんの人たちがシュバイツァー先生に病気を治していただきたくてやってきました。先生はどのような病気の人も優しく迎えました。痛くて苦しんでいる人を一日中みて、夜になるとピアノで讚美歌を弾いて祈りました。子どもにも大人にも、聖書に書かれている神さまイエスさまのお話をして、「私たちは神さまに愛されている兄弟です。家族です」と伝えました。

シュバイツァー先生の子どもの時に、小鳥を撃とうとして気づいた小さないのちも大切に作る気持ちは変わらず、ジャングルの中でも、虫や鳥や動物たちを大切にされました。シュバイツァー先生の写真が載っている本を見ると、先生のそばには、アリもサルも鳥もブタも一緒に写っています。

シュバイツァー先生に病気を治してもらった人は、「先生ありがとうございます。先生のおかげで元気になりま

した」とお礼を言いました。でも先生は、必ず「あなたを助けたのは私ではなくイエスさまです。イエスさまが私といっしょにいて、支えてくださったから病気を治すことができました」と、言われたそうです。

シュバイツァー先生は、神さま・イエスさまに愛されていることを心の力にして全てのいのちあるものを愛し、苦しみに寄り添い、病気を治し、イエスさまのことを伝えることをされました。

愛されているように愛すること、そして誰かと喜びや悲しみを分かち合うことは、イエスさまとともに平和をつくりだすことです。

参照 大谷美和子著『少年少女信仰偉人伝 シュバイツァー』（教会新報社）

エリカ・アンダーソン（写真）、ユージン・エクスマン（解説）、野村実（訳）『アルベルト・シュヴァイツァーの世界』（白水社）

A V A C O 教会協力部（編集）『新約聖書お話集』（キリスト教視聴覚センター）



東洋英和幼稚園の礼拝  
(輪になって集まる礼拝の形は昔から受け継がれています。  
始業礼拝など親子で共に守ります)

東洋英和女学院 説教集 第五号

発行日 二〇二二年一月六日

編集 宗教教育委員会

発行 学校法人東洋英和女学院

東京都港区六本木五丁目一四番四〇号

☎〇三・三五八三・三三二五

